

S.C.WORKS 今週のスタディ！

【ヘッドライン】

- 1) 「ドラッグ店で焼きたてパン、顧客ニーズに寄り添う」
- 2) 「“漁師不足”頼りはIT」
- 3) 「サンスター、歯ブラシとスマホ連動」

1) 「ドラッグ店で焼きたてパン、顧客ニーズに寄り添う」

市場規模が6兆円を突破したドラッグストア業界だが、消費増税による販売減やコンビニエンスストアや食品スーパーとの競合など逆風に立たされている。大衆薬や日用品、化粧品を充実させた店舗では集客に限界がある中、店内に高級パン売り場を設けたり生鮮野菜や精肉の売り場を設けたりするなど既存のドラッグストアのくくりにとられない店作りに挑む。

首都圏を中心に店舗展開するくすりの福太郎（千葉県鎌ヶ谷市）は昨年7月、店内に高級焼きたてパンの専用売り場を設けた初富本町店（同市）を出した。

同市内の人気パン店「キャニス・ミノール」から1日2回商品を仕入れ、店に並べる。価格は1個160-500円と一般的な量販のパンよりも高価格帯だが「売れ行きは好調」（同社）。近所に住む会社員の佐藤千寿子さん（41）は「190円のクリームパンが好き。ちょっとした自分のご褒美に買い求める」と話す。

同社の関根裕之第一営業部長は「1-2週間に1回程度のドラッグストアの来店頻度を高める必要がある」と話す。同社は昨年3月には、ドラッグストアの品ぞろえに、いれたてコーヒーや店内調理の空揚げ、弁当などをそろえたコンビニ業態の駅前立地の実験店を同市内に開設して集客力を高める取り組みを進める。

日本チェーンドラッグストア協会によると2013年度のドラッグストアの市場規模は6兆97億円と初めて6兆円の台に乗ったが、前年度比の伸び率は1.2%と過去最低だった。総店舗数は1万7000超に上り、飽和感も漂う。その中で処方箋の必要な医療用医薬品を扱う調剤薬局の併設店や、食品を充実させた店などを増やす大手が相次いでいる。

首都圏・東海地盤のクリエイトSDホールディングスは全約440店中、郊外などの200店超でパックされた精肉を販売する。生鮮野菜なども取りそろえスーパーの顧客を奪う考えだ。

郊外型の大型店の展開で成長してきた北陸地盤のクスリのアオキ。スーパーと見違えるくらい充実した野菜売り場などをそろえた店舗を約40店出店するほか、5月からは全約250店で公共料金の収納代行サービスを始めた。「徹底的に顧客の利便性を追求する」（同社）

最大手のマツモトキヨシホールディングスも昨年末から郊外で従来の同社の店舗よりもメーカー品を1-2割安くし食品を充実させたエブリデー・ロープライス（EDLP＝毎日安売り）の新型店の展開を始めた。地域や顧客のニーズにどれだけ即応できるか、ドラッグストアの概念に縛られない発想が生き残りのカギとなる。

これまでドラッグストアで扱う食品と言えば、保存の利く菓子やグロサリーが一般的だったが、それももう過去のものになりつつある。

くすりの福太郎のように自社で製造するのではなく地域の店と協力するというのはスーパーの特権だったように思うが、それも垣根を超えてきている。

ますますボーダレス化が進み、オムニチャンネルも広がることによって小売・流通業界は今後もまだまだ大きく変わっていきそうだ。

2) 「“漁師不足”頼りはIT」

平成25年の漁業就業者数は約18万人と過去最低を更新した。日本の漁業の現場は、ITとロボット技術なしでは成立しない。水産庁は、イルカの持つ優れた超音波探知（ソナー）能力を活用した新たな魚群探知機の開発を急ぐ。

通称「すごい魚探」というこの機器は、魚群量だけではなく、魚種や魚体長まで把握できる「次世代型計量魚群探知機」だ。水産庁海洋技術室は「多くの魚種を擁するアジア水域で魚種別の資源管理や、ソナー探査が困難な海底や河川などでの魚群探査も可能になる」と期待を寄せる。

一方、水産総合研究センターは、探査ロボット「水中グライダー」で海中の水温や塩分などを測定している。尾翼で海流をとらえ、少ない消費電力で動くこのロボットは、最大約1年間、約6000キロを移動できる。海中のプランクトンの数や水温、塩分濃度などのデータを収集する仕組み。「海が荒れていても利用可能で、人間ができない貴重な調査が行える」という。

このほか同研究センターなどでは、巻き網船の補助艇を無人化する「ロボット補助艇」、船の船底や養殖場の網を清掃する「洗浄ロボット」、干潟を耕す「耕運ロボット」などの開発も進める。漁業現場のロボット化は着々と進んでいる。

漁業だけでなく人口減や働き手の不足によって様々な業界で将来に不安を抱えているが、今後、ITの力というのは今まで以上に期待が寄せられると思う。

こうした背景を知り、当たり前が魚が食べることが出来ているということに改めて感謝しつつ、今後の技術進歩を応援したいと思う。

3) 「サンスター、歯ブラシとスマホ連動」

サンスターは12月24日、歯ブラシに取り付けて、歯磨きにかけた時間や磨き方の癖などのデータを測定する小型機器「G・U・M PLAY（ガムプレイ）」を開発したと発表した。専用アプリをダウンロードしたスマートフォンにデータを記録し、健康管理などに活用してもらうのが狙い。今後、製品化し、来年夏以降の発売を目指す。

使用時の歯ブラシの振動を音声データなどに変え、スマホを用いた音楽演奏やゲームも可能。自社製品以外の歯ブラシにも取り付けられるようにする見込み。

サンスターは「健康管理に役立つのはもちろん、歯磨きの時間を楽しんでほしい」としている。

「正しい歯磨き」は意外とできていない人が多いと思う。知識を得るためには歯科に行ってチェックしてもらったりと、気軽には言いづらいところもある。
このようなアプリなどでチェック・管理できると今まで気付かなかった自分の癖や磨き残しなどに気づけるのでとてもいいと思う。
また、子ども向けアプリを用意出来れば、子どもたちにも楽しく正しい知識を得てもらう事もできそうだ。歯ブラシ以外にも、お箸や筆記用具など手に持って使うものには幅広く応用が効きそうなのでこの技術が広まってくれれば嬉しい。